

「“今どき”の授業を考える」

日 時：2009年12月17日（木）11時30分～13時30分

場 所：池袋キャンパス ライフスナイダー館1階

司 会：

谷野 典之 異文化コミュニケーション学部教授
全学共通カリキュラム運営センター言語教育科目構想・
運営チームリーダー

参加者：

森 聡美 異文化コミュニケーション学部准教授
全学共通カリキュラム運営センターFD委員

浜崎 桂子 異文化コミュニケーション学部准教授
全学共通カリキュラム運営センタードイツ語教育研究室主任

沼澤 秀雄 コミュニティ福祉学部教授
全学共通カリキュラム運営センター総合教育科目構想・
運営チームメンバー

原田 久 法学部教授
全学共通カリキュラム運営センター総合教育科目構想・
運営チームメンバー

福原 久美 学生相談所カウンセラー

○谷野 それでは、「大学教育研究フォーラム第15号」の特集「“今どき”の授業を考える」をテーマとした座談会を始めたいと思います。

今日、司会を務めさせていただく異文化コミュニケーション学部の谷野典之です。全カリでは中国語を担当し、言語教育科目構想・運営チームリーダーを務めております。よろしくお願ひします。

まず始めに、本日の座談会に参加していただく各先生から自己紹介をお願ひしたいと思います。

○森 異文化コミュニケーション学部の森聡美と申します。全カリでは英語を担当し、FD委員も務めております。今日は楽しみに参りました。よろしくお願ひいたします。

○浜崎 谷野先生、森先生と同じく異文化コミュニケーション学部の浜崎桂子と申します。全カリではドイツ語や総合A科目を担当し、ドイツ語教育研究室主任を務めております。

○沼澤 コミュニティ福祉学部スポーツウエルネス学科の沼澤秀雄と申します。全カリでは、総合A科目や総合B科目、スポーツ実習科目を担当し、総合教育科目構想・運営チームメンバーを務めております。

○原田 法学部政治学科の原田久と申します。立教大学に着任して未だ5年目です。全カリでは沼澤先生と同じく総合教育科目構想・運営チームメンバーを務めております。今日は、“今どき”の授業についてみなさんと一緒に考えたいと思います。

○福原 学生相談所カウンセラーの福原久美と申します。主に新座キャンパスの学生相談所で勤務しております。全カリでは、学生部が発案部局となっている総合B科目の「自己理解・他者理解」と「対人コミュニケーション」を担当しております。今日は授業における学生の様子などをいろいろお聞きできるのではないかと楽しみにして来ました。よろしく願いいたします。

I “今どき”の授業

○谷野 それでは、本題に入っていきたいと思います。まず糸口として、先生方が立教で学生と接してこられて、最近こういう傾向があると、最近こういうことによく気がつくというようなことを中心に少しずつ紹介し合っていくということから始めたいと思います。おそらく、この『フォーラム』をお読みななる方々も、普段目にするのでできない教室の様子などにきつとご関心をお持ちだと思います。

まず原田先生、いかがでしょうか。

○原田 私はいま法学部の1年生向けの専門科目である「政治学入門」という科目を担当しております。この科目の履修対象者は法学部で600人ぐらいおりまして、それを2つに分けて、法学科の1年生については同じ法学部政治学科の五十嵐暁郎先生が担当なさって、残りの2つの学科（政治学科と国際ビジネス法学科）と2年生以上を私が担当しております。1年生のときには、専門科目がどうしても少ないものですから、必ずそれを取ってくるわけがあります。そうした科目を1年生向けに担当しております。

また、2年生以上では、「演習」や「行政学」という自分の専門の科目を持っております。ときには、全カリの総合B科目を担当したこともございます。

これらの科目でいいますと、一番、「快適に授業ができる」のは自分の専門である「行政学」です。その理由は、学生たちが自分の関心に基づいて履修してくる。しかも2年生、特に3年生以上が履修してきて、大変履修の態度がよろしい、答案もよくできているということだと思います。

ところが、法学部のほぼ必修の科目である「政治学入門」や全カリ科目になると、どうもその括弧付きの「快適さ」のようなものがない。たぶんこれは、教員の側からの勝手な思い込みですが、「行政学」の場合、学生がこちらのしゃべることを一所懸命聞いてくれて、こちらとしてもそれに応えようとするいい関係が成り立っている。しかしながら、1年生の科目ではなかなか成り立たないということがありますし、全カリ科目の場合には、いわんやいろいろな学問的な背景を持った学生がいるわけですから、そういった学生を目の前にすると、そうしたいい関係ができてこない。そうした意味での「快適さ」が、なかなか形成しづらいという気がしているわけです。

それはいったい何なのかということが、今回のおそらく、「“今どき”の授業を考える」という一つのきっかけになるのかもしれませんが。そのあたりが、どうして生じているのかというのは難しいところですが、だんだん少子化が進行し、大事に育てられてきた子



原田 久

どもたちが学生となりここまでたどり着いている。その結果、なかなか本当の意味で自分で考えて学ぶというようなことに、まったく慣れていないといえますか、そういう気がする、そういう学生がたくさん来ているのではないかと。

ですから、今年の試験問題では、「あなたが興味深いと思う政治学の問題を自らつくりなさい」という問題を出しました。要するに、問題を与えられてきて大事に育てられてきた学生なので、自分で何か問題を発見するということができないし、与えられたリアクトはできるけれど、自ら何かを作り出すという発想がまったく欠けている。ですから最初の数回、「政治学入門」では、頭の転換といえますか、それに相当エネルギーを割いている。自分で問題を発見することが素敵なんだよと。この問題を解きなさいと、私は絶対に言わないと。自分で考えてみるというような方向に変えていくということに、相当なエネルギーを使った記憶がございます。

どうしてそのようになっているのかというのは、それぞれの分析があらうかと思えますけれども、やはり自分で問題を設定することを、そもそもしないというか、そういう発想にない学生たちが多くなっているのではないかとこの気がいたしました。

○谷野 今、原田先生から問題提起していただいたような「学生が自分で学ぶことに慣れていない」ということは、おそらくどの先生方も程度の差こそあれ、きっとお考えになっていることではないかと思えます。

続いて、沼澤先生いかがでしょうか。

○沼澤 私は、全カリでは総合Aや総合Bなどの講義系科目とスポーツ実習などの実技系科目の両方を担当しています。以前から全カリ総合科目は大人

数科目が多く私語が多いというような（最近では少し改善されているような気がします）状況がありますが、実技系科目でもそのようなことが少し起こってきているようです。周りとの協調性といえますか、教員が話しているときでも、集中できなかったりというようなことが、どうも起こってきているかなと、少し心配になっています。

先ほどの原田先生のお話にもつながりますが、演習科目などでいろいろな課題設定型の授業をすると、どうしても受け身で、講義を聞いているだけのようになってきていて、自分からリーダーシップを取って、「じゃあ、こうやろうか」という、仕切り役の学生がすごく少なくなっているという感じがします。

それを、どうすればいいかということ、いろいろ工夫はしているのですが、なかなかうまくいかないというのが現状です。

○谷野 授業中の私語

の問題は数年前から立教大学では課題としてきました。特に全カリでは大事ですね。

では続いて、森先生。英語は総合科目に比べれば少人数ですが、必修科目でもあります。いかがでしょうか。

○森 立教大学に着任して未だ5、6年かと思うので、そのなかで大きな変化があったかどうか、また、これが大学生というものなのか、最近の変化なのかは、正確にはわかりません。しか



沼澤 秀雄

し、たぶん原田先生や沼澤先生がおっしゃったことと同じようなことかと思うのですが、自分からクラスを引っ張ってみようとか、主体的に自分から学ぼうとか、ディスカッションになったときに自分からリードしてみようとか、そのような学生はとて少ないように感じています。

英語のような言語教育科目ですと、特によく話せるような学生たちの場合、「3、4人で、与えられた話題について話し合いをなささい」という課題を出すのですが、『『あなたはどうか?』、『あなたはどうか?』』そして「おしまい」という感じなのです。何かもの足りないような気がします。

○谷野 ディスカッションとして話が膨らまないことが多いですね。

○森 しかも誰がリーダーになるか、なかなか決まらない。最近、私のほうからディスカッションの初めに「リーダーを決めてください」と言います。役割を最初に決めさせてしまうと、一応話ではできるのですが、決めさせるという作業をしないと、グループディスカッションがいったい誰からどう始めていかかわからない。本来であれば、そこは放っておきたいところなのです。それで何となく誰かが舵を取り、空気を読みながらやってくれたらいいかと、最初は思ってたのですが、あまりそれがうまくいかなかったのです。

小さいグループなり、あるいはクラス全体でもいいのですが、自分から率先して引っ張っていきこうという学生が少ない。あるいは文化的にやりづらい、というか、典型的な日本人だと、それをやりづらいのかもしれないですけども、遠慮のし合いが非常に目立つのは残念なところだなと思っています。

たぶん、上級生になると、だんだん意識も出てきて、特にそのテーマに関心がある学生が引っ張っていったり、

ゼミになればそういうこともあるのでしようけれども、特に1、2年次においては、そういう傾向が非常に強いということで、言語学習には、もう少し積極性が必要なので残念なところだなと思っています。

もう一つは、依存心がとても強いとか、おそろく親御さんへの依存心でもあり、教員への依存心でもあると思うのですけれど。たとえば出席の管理、



森 聡美

何回休んだのか自分で管理しておかないといけなと言わないと、「先生が教えてくれなかったから4回休んじゃったんだ。（*必修の英語科目では4回欠席すると不合格になる）」と言ってくる学生が必ずいるのです。もちろん、全員ではありませんが、そのロジックが通ると思っているのが、不思議なところです。

私が「誰の責任か、よく考えてみて」と言うと黙ってしまいます。すごく教員に甘えていますね。みんなではないですけども、大学生なのだから、もう少し大人になれないのかなと思う場面です。

○谷野 では続いて、全カリでは初習言語であるドイツ語の授業を担当していらっしゃる浜崎先生、お願いします。

○浜崎 私は、立教大学に着任してまだ1年半なので、私がいま立教で見ていることが、“今どき”の立教のことなのか判断しかねますし、なるべく判断しないように自分ではしています。大学で教え始めて約10年ですが、“今どき”

の学生を考えるとときに比較対象になるのは、結局自分が学生のとときですね。

語学の授業に関しては、ちょうど私自身が、おそらく古いパラダイムの授業を受けた最後の世代で、その後、大学の語学の授業の仕方は、大きく変わっています。自分が学生のとときには、語学の授業であっても講義系の授業のように学ぶのが、ある意味では当然であったのですが、いまはインタラクション(interaction)を求められている。そして、それがとてもうまい学生もいます。自分たちが学生のとときに比べて、教員とのコミュニケーションも、それから語学の授業のなかでのインタラクションも、非常に上手だなと思う学生たちは少なくありません。たとえば授業でペアワークをするとしますよね。中学・高校で、すでにそういうトレーニングを受けていて、とてもクリエイティブにできるのです。

一方で逆に、教員とのコミュニケーションはもちろんですが、学生同士のコミュニケーションもなかなかできない学生たちもいる。うまく隣の学生と話せない、顔も見られないという学生も、もちろん数は多くないけれども一定の割合でいます。そういう場合のケアを、こちらは求められているのかなと感じることがあります。

どちらの学生も、自分の学生のとときに比べると、まじめだと思います。まじめであるがゆえに、自分の殻を

出られなかったり、あるいは、まじめであるがゆえに逆に教員とのコミュニケーションも、よくも悪くも屈託がない。もう少し教員に対して意地悪になってもいいのではないかと、私はちょっとあまのじゃくに思うこともあります。教員が言うことを疑ってかかる、この授業でやっていることが何なのかということ、疑ってかかるというような、そういう何か突き上げのようなものが来たら、もっと面白いのにとすることがあります。

○谷野 そうですね。教員に対する甘えとか、二極分化、インタラクションに対してうまく適応できる学生、それからコミュニケーションにそもそも問題を抱えている学生といったキーワードが並びましたね。

さて、いままでのお話は教室のなかでの状況を中心としたものでしたが、その一方で、教室では見られない学生の側面もあるかと思います。そこで、学生相談所でカウンセラーをなされている福原先生から、“今どき”の学生を取り巻く背景なども含めて話題の提供をお願いしたいと思います。

Ⅱ “今どき”の学生とその背景①

○福原 「自己理解・他者理解」や「対人コミュニケーション」といった科目が設置された背景には、従来でしたら社会のなかで、もしくは正課外教育の中で培われてきたり養われてきてしかるべき対人関係におけるコミュニケーションのあり方が変わって来ていることが考えられます。と言いますのは、自分自身を掘り下げて、自分とはなんぞや、いかに生きるか、大学生を送るかなどということについて考えたり話し合ったりする機会がなくなってきたことにあります。そのために、あえて授業で取り上げなくてはいけないと



浜崎 桂子

いう状況になってきたのです。

「自己理解・他者理解」は、講義系の科目で10年近く前に発案されました。その授業を踏まえて、体験学習を中心とした夏季集中の科目である「対人コミュニケーション」が4年前から始まりました。これらの科目は社会に生きる人間というか、大学生にとっての基本と言ったらいいでしょうか、それをまず身につけてもらわないと大学生活を円滑にというか、彼ららしく送れないのではないかというような危機感をもとにできあがった授業です。

実際、「自己理解・他者理解」は、履修希望者が増えてきて、今年は教室を変えるぐらいたくさん入ったのです。科目の開設当初の履修者は140名くらいでしたが、最近では200名を超えてきました。大人数授業なものですから、なかなか全員を把握しきれないですし、どうしても講義形式になってしまいます。

“今どき”の学生たちの悩みの一つとして、「自分は話題を出せない」、「話題が少ないので盛り上がる話ができない」、「自分のことを話すとき暗くなるのでできない」、そのようなことがあるようです。つまり、自分のことを掘り下げたりすることは暗いことである、あまりそういうことを話題にして出せないような風潮が、思い込みだと思おうですけれども、それがあつたのですね。

ですから、それを取って、そういう暗い話題というわけではないのですけれども、正面から、いかに生きるか、青年期とは何か、家族とは、恋愛とは、結婚とは、友情とは何かという話を、この授業で話しているわけですね。

それは、“今どき”の学生は友だちのなかであまりできない話題であり、それをあえて取り上げて、毎回レポートを書かせてといった感じをしているわけです。ですから実際に、本当だった

ら友だちのなかで考えたり話し合ったりすることを、あえてこの授業でやっている。

それで、そのなかで授業に参加する人たちはどうなのかということですが、いろいろ、前のほうに座っている学生は一所懸命聞いていますが、でも、



福原 久美

うしろのほうは私語が多いですね。居眠りも多いですし、あとは携帯電話で何かやっている。私は自分が担当する授業でないときに教室の後ろで様子をみていたりすると、ひどいときは漫画を読んでいる学生もいたことがありました。これには注意をしました。しかし、その学生に注意されたことを、あとでディスカッションのときに聞きましたら、すごく喜んでいたので。注意されたいと思っていたのです。

○沼澤 ああ、なるほど。

○浜崎 無視されたくないわけですね。

○福原 だから、注意されることも何かうれしいというようなことを言っていて。それは何だろうと思ったのです。本当は人との具体的な関わりを求めているのではないかと。そのように自分自身を深く掘り下げて、いろいろ自分のことを考えるだけでは、やはりコミュニケーションという点では不十分です。そこで、「自己理解・他者理解」に加えて、「対人コミュニケーション」を集中授業形式で、夏休みを使いまして体験学習をいろいろやっています。

この「対人コミュニケーション」の

定員は60名ですが、やはり履修希望者はすごく多いです。かなり落とさなければいけない。けれども、なかには「4日間で2単位は軽いよな」という感じで参加している学生もいます。いろいろなワークをとおして、実際的にいろいろなことを体験するというのは、すごく新鮮らしいのですね。感動したことやそこで得られたことを最後に書いてもらうレポートに、いろいろな人が書かれています。

私たちはよくコミュニケーション能力というようなことを言うのですが、能力と言うと、初めから備わっているように錯覚を起こしますけれど、これは言葉の学習と同様に学習していかなくてはいけないものだと思うのです。それは本来でしたら、大学に入るとき、もう学習していいはずなのに、していないので、このような授業をおこなわなければいけないと思っています。

このように見てみると、「今どき」の学生の特徴を考えるうえでのキーワードとして「社会的内向・思考的外向」ということが挙げられるのではないかと思います。

○谷野 「社会的内向・思考的外向」ですか。

○福原 社会的に内向で、思考的に外向である。つまり、関わりはあるんですよ。携帯電話やメール、あとインターネットが普及して、ものすごくアンテナは広がっていて、情報量は圧倒的に増えているんですけども、その一方で、実際的な多様な人とのかかわりがものすごく少ないんですね。ですから、社会的にはわりと引きこもり気味である、準引きこもりともいうべきなのではないでしょうか、あまり人とは関わらない状況で、でも、アンテナはものすごく外に広がっている。人の評価を気にするし、いろいろ自分の内側を見つ

めようとするよりも外にアンテナを張り巡らすような感じになっているのではないかと。そこで、今日の座談会では「社会的内向・思考的外向」というキーワードで「今どき」の学生の特徴としてお伝えしたいなと思ってきました。

○谷野 福原先生のお話のなかで、大学生としての基本という言葉がありました。いままでの先生方の問題提起のなかで使われていた、たとえば私語の問題であったり、問題発見ができない受け身であったり、リーダーシップが取れなかったり、遠慮のし合い、教員に対する甘えなど、考えてみると、それはみんな大学生としての基本ができていないということだと思っています。

問題は、そういう「今どき」の学生の気質がどうしてできてきているのかという、一つは原因を考えるということもありますし、あと実際に授業の場で、そこから派生してどういう問題が起こるか。それに対して教員側がどのように対処するかと、いろいろ考え方はできるとかと思っています。

原田先生、これまでの先生方のお話をお聞きになって、いかが思われますか。

Ⅲ 所属学部による違い

○原田 新座キャンパスの学生相談所のお仕事をされている福原先生に是非お伺いしたいことがあります。新座キャンパスでは、他人に対する一定のおもてなしのようなことを学ぶ観光学部、人とコミュニケーションとして何かやっていく場面で活躍する人材を育成するコミュニティ福祉学部、人の内心と身体のありようを考える現代心理学部、といった私からすると一見対照的な学部が同居していると感じています。そこで、最近の授業におけるか、あるいは学生の変化という場合には、これら

の3学部には何か違いがあるのでしょうか。

どちらかという、池袋の場合には、文・経済・理・社会・法などのクラシカルな学部が比較的ずらっと並んでいるわけですが、新座には両極端な学生がいるようにも思うわけですね。とにかく人をもてなしたいという学生と、より自分を考える学生とは、ずいぶん違うのではないかなという気がします。それは素人目なのかもしれませんが、いかがでしょうか。

○福原 それは私も、本当に一般論になってしまうのですが、学部を選ぶときに違うタイプの人が選んでいるのだなというのが、まず一つあるのと、その学部の方向性と言うのでしょうか、違いがあるのは感じます。

たとえば、観光学部の場合は、みなさん明るいですね。すごくホスピタリティーというか。いろいろな面でグローバルで行動的な感じを受けます。逆にその明るさについていけない学生もいるようで、学生相談所を利用する方に少なからずその傾向がみられます。

コミュニティ福祉学部の場合ですと、やっぱり他者との関係をととても大事にするという、すごく優しい学生が多いのです。だから、とても友達らのことも気にしますし、逆に人から言われたことをすごく真に受けてしまったり、気にして悩む。優しすぎて、ちょっと悩んでしまうというような学生でしょうか。まじめなんですけれども、ちょっと素直すぎて、もう少しいろいろと疑ったり、反論してもいいのではないかなという感じがあります。

よく例えで私は出すんですけども、P-Fスタディーという心理テストがありまして、いろいろなシーンの漫画というか絵があって、そこに吹き出し口が書いてありまして、それに、こん

なシーンのときにどのように答えるかという、そういうテストがあるのです。これはだいたい前の話なので、最近はどうかわかりませんが、ある先生が、その授業のなかでそれをやったら、びっくりしたことにみんな同じような答えだったと言うのです。「これって、何なんでしょう」と私に聞かれたことがありました。

それはどういうことかといいますと、雨の日に車が道をばーっと走ってきて、水が跳ねたりしますよね。道の脇を歩いている人が雨の日に水を跳ねられてしまったらしいんです、そういうシーンなんです。そのとき、あなたはどのように答えますか、その人が言いますかという吹き出し口がある。そうしたら、ほとんどの学生は、「あ、大丈夫です」「平気ですから」「いいです」というように言ったというのです。

でも、それは優しいけど、みんながみんなそれでいいのだろうか。ストレスが溜まるのではないか、言うべきことは言わなければいけないのではないか、「ちょっと気をつけなさい」とかね。そういうことに、ちょっと象徴してあらわされているところがあるかもしれないと思います。

一方で、コミュニティ福祉学部のスポーツウエルネス学科の学生は、既存の新座キャンパスの学生ともちょっと異なるタイプのような気がします。自分自身のウエルネスに関する勉強をする学科であり、それも心だけでなく身体をいろいろ使いますので、比較的バランスがとれているのではないかと思います。

最後に、現代心理学部の場合ですと、映像身体学科と心理学科でまったく違うんですけども、自分自身にも関心がありますし、心理的ないろいろなことに関心がある学生はもちろん来ているんですが、自分にいろいろな意味で

関心があり、自分自身に対する問題を抱えている学生も多いようです。

特に心理学科ですと、人間と直接関わるような臨床系を志向する学生が多いですから、学生相談所でいろいろ提供するプログラムも、わりと早く申し込んで、ぱっと関心のあることには申し込むということがありますね。

○原田 ありがとうございます。そういう意味では、学生の様子、戸惑いと言うと、何なく単数形で語ってしまったり、抽象的に語ってしまいがちですが、もうちょっと細かく見ると、それぞれカラーがあるというか、学部を選択する際の傾向のようなものが、その後の学生の行動に影響しているということがあるんですかね。

○福原 それは、何かどうやらありそうなんです。最近、私どもの学生相談所では、部長会などでも“今どき”の学生状況について報告する機会があるのですが、あくまでも相談所を利用する学生から見た傾向ですが、学部ごとにカラーが違うのではないかとこのことでこんな傾向がある、こんなタイプの人が多いのではないかとこのことを述べさせていただいています。あまりカラーをつけてしまうのもいけなと思いますけれども、学部によってそれぞれ傾向が違うというのが実感です。

○森 ありますよね。語学のクラスは学部ごとにクラス編成されているので、学部によってカラーが違うように思うことがあります。本当にいい意味で、何か違うんですよ。やはり学部を選択する理由があるのだと思います。

○福原 学部について何も考えずに入学してしまうと、困る人もいますね。よく考えずに学部を選んでしまった。転部・転科の相談も多くなってきている気がします。

○森 私は、この学部じゃなかったはずだ、というように感じる学生は少な

くないように思います。

○谷野 いわゆる、最近よく言われるミスマッチという問題ですね。

IV テレビ化する授業との格闘

○原田 私たちのような法学部の教員は、どちらかというとな人数教室の授業を必ず担当することになります。先ほどの対人関係で言うと、言語の先生方が学生と向き合うとき、その瞬間は学生にとってはポジ (positive) の世界で、一所懸命頑張る世界。これに対して、大人数教室というのは、ちょっとのんびりするとか、ポテトチップスを食べながらテレビを見るような、そういう感じがある。要するに、ストレスフルな世界から一瞬脱却して、のんびり茶の間でテレビでも見るかというような感じが、あるような気がするんです。

私は、その格差がすごく嫌なので、私はできる限り、大人数教室でもマイクを向けてコミュニケーションするようにしているんです。そうすると彼らは、マイクを向けられるということそのものに驚きを感じて、せっかくテレビを見ているのに、何でじゃまをするんだというか、そういう感じがあるんですね。

当てられて嫌だったと。言語の科目は当てられてもしょうがないが、大人数科目では納得がいかない、というように学生は思っているようです。

○森 確かに、言語は少人数なので、仕方がないと思っている節もある。

○原田 言語の科目はしょうがないと思う。だから、大人数教室は何か、のんびりするところで、ネガ (negative) などなんなんだと。だから、何というか、あちらで無理して頑張って、ここで休むというような、そういうことをさせない、非常に厳しい学部なのか

もしもできませんけど、できる限り話しかけていこうと思っています。

しかし他方で、みんなの前でやっぱりしゃべるといのは。

○森 勇気がいる。

○原田 8人や20人の前でというわけにはいかないんですね。そのときにいろいろなタイプがいて、一番究極的なタイプは、目を合わせるんだけど、一切口を開けないという学生ですね。そういう学生がいるんですよ。

○森 そんな学生もいるんですね。

○原田 まだ一所懸命、むしろ答えようという学生はいいんですけども、やっぱりそれは、いろいろな心理的なストレスを覚えているんじゃないかな。授業評価アンケートの自由記述で、「当てないでくれ」と書いてくることもあります。そういう反応があるというのは、通常の大人数教室ではあり得ないストレスを与えられた、そういう感じがあるのかなという気がします。

○森 でも、40人、30人、いや15人のなかでも「急に当てられるのは嫌だ」と言う学生もいます。じゃあ、自分から発言すればいいじゃないと思いますけど、それはなかなか難しいようですね。

たくさんの前でというと、何か言葉が出なかつたり緊張したり。学生の視点からすると、きっとそういうのはあるんだろうなと思うんですけど、でも困りますよね。こちらとしては、それも授業なんだからと。

○谷野 私は以前から気になっているんですが、私語の問題はすごく立教で大事だと思うんですね。よそから兼任講師あるいはゲスト・スピーカーで来ていただいた先生が、講義形式の大きな教室で授業をされて、こんなにうるさい大学は始めてだとおっしゃって、大変お怒りになっているのを何度か見たこともあります。

○森 全カリの授業ですか。

○谷野 ええ。都内でも、立教大学の私語は悪質だと私は感じています。あと、自分がその大きな教室に立って驚くのは、授業の進行とかかわりなく、うしろのほうの席で勝手に出たり入ったりしているんですね。何かそれを見ていて、ふと思ったのは、いまままた原田先生も同じようなことをおっしゃっていましたが、彼らにとってみると大人数の講義科目は居間でつけばなしのテレビのようなものなんですね。だから、自分がトイレに行きたくなれば、すっと出ていくし、何か気になることがあれば携帯電話もいじれば、友だちとも話してしまう。

確かに言語の小さなクラスだと、そういうのは許されないの、講義科目が息抜きの場になっているというご発言、それは確かによくわかるんですけども。でもそれも、じゃあ息抜きのままでいいかということ、もちろん先生がおっしゃったように、それではいけないので、大人数教室のなかで、どうやってコミュニケーションが取れるかたちにするかですよね。いま、地デジですら、何かボタンを押してアンケートに答えられる時代ですから、何か授業のなかでも、そういう関係はつくっていかなければいけないでしょうね。

○原田 いま、双方向性があるような授業運営の工夫の一つとして導入されつつあるクリッカーを用いるタイプの授業があります。でも、見ている側と見られている側が完全に一応分かれているから、気楽にボタンを押せるというように、双方向といっても限界があるように感じています。

○浜崎 やっぱりテレビなんですよ。

○原田 しょせんテレビという気もしくなくもない。努力をして導入していらっしゃる先生に対しては失礼な言い方かもしれませんが。

○**浜崎** 私は、いままで、せいぜい60人ぐらいの講義しかやったことがなかったんですけど、今年初めて470人という総合A科目の授業を担当しました、本当にそのギャップにびっくりしました。

○**森** やっぱりテレビですか。

○**浜崎** ええ。私はテレビなんだなと思っていましたね。つまり、こちらでやっていることと向こうでやっていることは、本当にまったく関係ない。途中の出入りもそうですし、漫画ならまだいいと先ほど思ったのですが、なかには、携帯ゲーム機をやっている学生もいました。

○**森** ポケモンとかね。PCを利用したクラスでも携帯ゲームに興じている学生が1人いました。

○**浜崎** そうなんです。いま本当に私は戸惑っているところで、どうしたらいいのか、何の方策も見つからないまま1学期を終わろうとしているという感じなんです。たとえばパワーポイントや映像を使うのであるとか、それなりの工夫はしてはいるつもりなんですけれども。一方で自分が向こう側に座っていたらどうだろうと想像してみると、40人のなかの1人だと思うのと、400人のなかの1人だと思うのでは、それはやはり違う。同じようにやろうとこちらが思っているといけないんだということに、いま私はようやく気がついたような次第です。難しいですね。

ただ逆に、40人の授業のほうの学生たちは、リラックスして楽しんでいるなと思うときもあります。

○**原田** そうですか。

○**森** やはり、毎回同じ仲間と一緒に授業を受けている、というところもあるかと思います。

○**浜崎** 「発言しなければいけない」ではなくて、わからなければ、わからないと言える、という意味で、逆に息を

抜いてくれている学生、いい意味でリラックスして教室で参加してくれている学生もいるような気はします。少人数授業と大人数授業とでは、当然ですが、やり方が違う、緩急のつけ方のようなことを、もう少し考えなくてはいけないんだと、本当に身を持って体験した1学期でした。

○**森** 学生自身が興味を持たない限り仕方がない。それは、学生の側のやる気の問題であるかと思います。

○**浜崎** 40人の場合は、「そこ、うるさい」と、別のことをおしゃべりしている学生に当てて、もう一回、こちら側に関心を向けさせるということが、インタラクションですることができるんですけども、400人の授業でそれをやっていたら、やっぱり授業が先に進まないです。

○**原田** うん。そうそう。

○**福原** そうですよ。

○**沼澤** 私も400人、500人の授業をやっていたんですけども、リアクションペーパーを使って感想を書いてもらったりすると、もっと静かにしてほしい、自分は勉強したいんだという学生は必ずいるんですよ。

○**福原** いますよね。

○**森** かわいそうですね。

○**沼澤** ですから、やっぱり何とかしてやらないといけない。話している方では、ある程度静かになっているなと思って話していても、教室のうしろのほうではうるさい状況もあるということもわかりますので、何とか改善しなければとは思っています。

○**福原** だから、いわゆる“まじめ”というか、みんな授業には出席します。出席することは大いに結構なんですけれども、「じゃあ、ちゃんとコミットメントしてよね」と思います。コミットメントしないで、とにかく何かリアクションペーパーを書いて、友だちに頼

んで先に出てしまう学生も、教室のうしろのほうには結構いたりします。



○沼澤 自分のやりたいことを我慢できなくなってきた学生も増えてきているような感じがします。

○原田 なるほど。

○沼澤 普通、授業中では、無断で教室の外に出るというのはありえないはずなんですけど、そのルールが全然意識されていない。

○浜崎 そこで面白いと思うのは、リアクションペーパーだけは出す、出席だけは取る。そういう形で、「他人の評価」を気にしている点です。逆に、私の講義がつまらないと思うんだったら、出席しない、つまり、反抗するとかかたちで、むしろ自分の意志を示してほしいと思います。それが。

○福原 それがないんですね。

○浜崎 何回出席しなくてはならないということだけは、きっちり守ろうとする。

○森 単位は取りたいわけですよね。

○福原 ええ、単位は取りたいんですよね。

○浜崎 そのあたりに何か違和感があります。

○森 そこまで問題を起こそうとは思っていない。

○原田 学生が自分のやりたいことを我慢できなくなっているというお話がありました。たぶんテレビを見てい

て、携帯電話をしたくなる学生はたくさんいるんですね。そのときに、携帯電話をさせないために、どうしたらいいかということ、できるかどうかはともかくですが、テレビの内容を面白くするという以外にないのではないかと思います。

○森 教員は、それしか考えられないですね。

○原田 さしあたりですけれども。要するに携帯電話のことは忘れて、お笑い芸人を見て笑っているという状態をつくり出すというか、そういうことなんです。

○沼澤 お笑い芸人ですか。

○原田 私はよく歌って踊れる行政学者になりたいと言うんですけど、それぐらいいないと、あの何百人の「視聴者」をつかまえないように思います。

他方で、授業評価アンケートの自由記述欄には、「よっ！原田劇場」と書かれたりするんですね。要するに、パフォーマンスが先に出ているんじゃないかということを見抜く学生はちゃんという。ちょっとオーバーアクションをして引きつけないといけないというのが、やっぱり嫌な学生というか、もう少しそれだったら、しっかり、かちつと教えてほしいということもあったりするようです。

○福原 何か訴えないといけないというか目に訴えて、耳に訴えて、視覚とか聴覚に。

○沼澤 最近の研究で、脳の発達が遅くなってきているのではないかという報告を目にしたことがあります。それによれば、小学生を対象として、テレビの画面で赤くなったらボタンを押してくださいといった、GO/NO-GOテストというのがありますが、赤色ではなく、オレンジ色でも我慢できなくて押してしまうということが見られるようです。我慢ができるようになるのは

脳の発達と関連があり、それが少しずつ遅くなってきている、ということがその結論でした。

○森 我慢することは、理性が働くということと関連があるということですね。

○沼澤 ええ。ただし、それは発達の問題だからと片付けてしまっただけいけないので、どうやったら授業をうまくやっていけるかということに持ってこないといけない。

○森 問題の根源を解決することにはならないかもしれないんですけど、私はいつも授業のことを考えるときに思いつくのがアメリカでの経験です。アメリカの大学では、大学生が授業で私語をしているなんて、少なくとも私が見たものではあまりなかったような気がします。私の場合は、大学院生として留学したので、学部生のいわゆる大講義は2、3科目しか聴講しませんでした。私の知る限りでは極めてまじめに聞いていました。それが1年生だろうと、2年生だろうと、何年生だろうと。それは、なぜだろうとずっと考えていました。

まず、学費を払っている意識ですよね。彼らは18歳になったら自立するように親から言われているから、そういう意識も強いんだと思うんです。アルバイトしながら来ている学生もたくさんいます。

もう一つは、講義には、必ずディスカッション・セッションが伴うことだと思います。講義の内容がちゃんと理解できていないと、ディスカッションに参加できない。きちんとした話し合いができるかどうか、評価されてしまう。そのうえに、テストがものすごく厳しいんです。すべてわかっていると点が取れないようにできている。

心理学の授業を聴講したことがあるんですけど、これでテストをされたらたまらないと思うぐらい、進度が速く、

そのディスカッションでも、きちんと内容をわかった上で自分の意見を述べなければいけない。厳しさの違いを目の当たりにしました。

それに対して、自分が日本の大学で学部生のときに受けた授業は、たとえば、授業で先生が何を言っているかさっぱりわからなくても、とりあえずレポートを書いたら、何かAやBが適当に当たりしたこともありました。それが自分でも的を外しているのかどうかすらわからないような状態で、そういうようなことの繰り返しだったような気がします。

だから、何かやり方や体制自体にも、きっと変えられる、努力すべきところはある。ただ、もちろん限界はありますし、まったく同じようにはできないと思うんですけども、少なくとも頻繁に理解を試される、わかったうえでパフォーマンスしなければいけない、というものがつきまとったときに、学生は変わらざるを得ないんですね。

○谷野 先ほど原田先生が、つけっぱなしのテレビの向こうで携帯電話をいじり始めた人をどうやってまた画面に戻すかという、そういうお話だったわけですね。それはやっぱり一つの真理ではあるけれども、もう一方で、いま森先生のお話にあったように、つけっぱなしのテレビにしない。簡単に言うと、向こう側からのアウトプットを求めるような仕組みとでもいうのでしょうか。そういうことも必要である。

また、浜崎先生からは、昔のたとえば、大学の言葉の授業というのは受け身で、先生に言われたことをやればよかった。それに対して、いまは、むしろインタラクティブ (interactive) な力が求められている。それに答えてくれるような層も確実に増えてきているようなお話がありました。私の経験でも、授業において、学生が自分たちでスキット

(skit) をつくって、二人で小芝居をさせる。そのときに、すごく面白いスキットを作ったり、こちらが感心するような学生もいれば、一方で本当に蚊の鳴くような声で、うつむきっぱなしで何を言っているかわからないよというようなもの、また出てきてしまう。やっぱり二極分化というのはあると思うんですね。

そのように考えると、つけっぱなしのテレビにさせないために、一つは面白いテレビでなければいけない。だから、その面白さが、見て受動的に楽しむ面白さではなくて、簡単に言うとテレビの中から何歩か出ていって、相手を巻き込んでいく面白さと言うんですね、そういうものが必要なかなと思うんですね。

ただ、それでも大きな教室で、いきなり当てる学生に意見を求めると、それだけで迷惑な顔をする学生がいることもたしかです。最近気になるのは、学



谷野 典之

生に当てると、私に対して答えるのではなく、隣の学生に聞き返すということがよく見られます。

○森 それは、最近では、ごく一般的なことではないでしょうか。

○谷野 やはり一般的でしょうか。

○森 「なになに、なになに」と、まず始まるんですね。ちょっとした照れ隠しもあるかもしれない。

○原田 私は、「理科の実験じゃありませんから相談しないでよ」と言うこと

にしています。

○谷野 そうですね。どうして私に質問してくれないんだろう？隣の学生と小さな声で話し合ってしまう。

○福原 自信がないということもあるんじゃないでしょうかね。

○森 あと、本当に聞いていなくて、とりあえず隣の人に確かめて聞くということもあるかと思います。

○谷野 でも、そういうのを打ち破りたいですよ。

○原田 私も谷野先生のご意見にまったく同感です。いま沼澤先生とご一緒に、全カリ総合教育科目の2012年度に向けたカリキュラム改革案についてディスカッションしているのですが、そのなかで、講義と小さな演習をセットにした授業を開講することができないかという意見も出ています。

要するに、何かこれをしっかり受けていないと、あるいは受けたことを前提として、さらに小さな少人数でやるような、たぶん全カリでは、いままではやっていない授業形態なので、「何かここをちゃんと聞いておかないとまずいよね」というようなものを、全カリでもやってみたらよいのではないかなという話も出ています。それは講義を聞いたあとすぐ演習ではないんですけれども、やっぱり何らかの連続性があるので、テレビの先に行こうというか、テレビのほうと何らかの関係を持つとういうようになるんじゃないかなと思うんですけどね。

○森 やはり、聞きっぱなしではなくて、何でもそれを使って練習問題をやる、それを使って何か話をする。そういったことがないと人間は聞きっぱなしにしてしまうし、聞いていてもつまらない。その結果、テスト60点取ればいいのか、友だちのノートを見ればいいのか、といった流れになり、それは学生にとっては自然な発想なのかも

しません。

○沼澤 いま総合教育科目の次期カリキュラム構想のなかで話題になっているのは、昔からの法学や文学、そういうベーシックな学問をちょっと面白くなくてもやる必要があるということですね。その一方で、「武蔵野の自然」のような、より具体的な科目も一般教養のなかでは必要だろうということも出ています。

いま、新座キャンパスの学部は、観光学部、コミュニティ福祉学部と現代心理学部ですけど、新座の学部は応用の学問というか、観光や福祉は、いろいろな分野の学問を総合して実践するような学部なので、ベーシックなところも学んだほうが学生はいいんじゃないかなとは思っています。ただし、つけっぱなしのテレビにならないように、ちょっとつまらなくても、我慢して聞けるようなことにしなければならぬかなと思うんですけどね。

○浜崎 テレビを面白くする、これが教員の側がまずやらなくてはいけない最初のことだということは、本当に同感なんですけれども、でももう一方で、「やっぱり授業はテレビじゃないんだ、教室はパブリックな場所なんだ」ということを、ここまでそれを覚えなくて来てしまった“今どき”の学生たちに、どこかできちんと教えるということがすごく必要だと思っています。

個々の学生からリアクションをもらったり話したりすると痛感するんですが、それぞれが本当にいい学生なんですよね。そこで、何か具体的に注意をすると、「ああ、そうなんですか」という反応がくることもあります。ルールを知らないんですね。たとえば授業を途中で退出するということが、しゃべっている教員だけではなくて、周囲の学生にどういう影響を及ぼすかに気づいていないことがある。だから、あ

なたが動くということは決してあなた個人のことでなくて、それが社会に影響を与えるんだよということを意識させるような、何かそういうことを伝える努力も、テレビを面白くする努力のなかには入っているのかなと思いますね。

○原田 そうですね。

○森 でも、大人数教室だとなかなか難しい。

○浜崎 たしかに難しいですね。自分ができる場所で言えば、たとえば言語の授業、つまりコミュニケーションを教える授業が、そういう課題を引き受けるべきかなと思います。40人の授業であっても、400人の授業であっても、同じパブリックな場所なんだということ、そして、主体的に参加する場であるのだということを教える場として、ですね。

○森 そうですね。いまお聞きして、最近、多少そういうことをしているなと思ったことがあります。従来、英語科目の成績評価では出席点は30パーセントで、極端に言うと、出席さえしていれば点がもらえていました。つまり、来て寝ている学生も30点、来てしゃべっている学生も、とりあえず30点のような感じだったのです。でも、これはやはり問題がある、ということになり、「出席と授業参加」とし、授業への姿勢・態度まで含めて30点と改めました。だから、寝ていたり、しゃべっていたり、漫画を読んでいたりと、携帯ゲーム機をやっていたりしたら、出席点から差し引くよと、必ずすべての先生から学生に対して言ってもらうようにしています。そうすると、ちょっと効果があります。

複数クラスが合同で行うR & L(PC)のクラスでは、アシスタントしかいない教室があるので、話そうと思えばいくらでも話せるんですね。

ちょっと前についおしゃべりをしてしまう学生がいたのですが、それはほかの学生にも迷惑だし、「出席と授業参加」の点が減点されることを何回か伝えました。そうすると一応、話すのだけは収まってくるんです。さすがにそれは自分にも不利だし、周りの人にも迷惑だということが、わかってきたのかな、と。

そんなことは、とっくにわかっているからいけないうことなんでしょうけど、あらためて伝える必要がきつとあったんだろうと、思いました。

○谷野 何かそういう「公共性とは何か」ということの教育は確かに、大学に入ってくる前のところまでに身につけていないということは感じられますね。

○森 本当はこんなことはしたくないけれども、学生に理解させるためにも、きちんとしておくことが必要だと思います。

V “今どき”の学生とその背景②

○谷野 これまでの議論では、授業で目に見えるかたちで、学生にどういう問題があるかということを中心に話してきましたが、一方で、教室に出てこれなかったり、あるいは気になるなと思っていた学生が、ある日また、ふっといなくなって出てこなくなってしまったり、そういった私たちの目に見えないところにいる学生の姿もあるかと思っています。そこで、福原先生から、“今どき”の学生の相談内容やタイプ、特徴について教えていただけますか。

○福原 先ほども「社会的内向、思想的外向」ということを申し上げましたが、ここでは「学生の変化とその背景」といったテーマでお話したいと思います。

まず、学生の変化のキーワードとし

ては、ゲーム世代だったり、携帯電話でつながるという、要するにバーチャルな世界でつながっているかと思います。でも本当に、携帯電話や携帯ゲーム機でしたか、そういうもので授業中までやってしまうということもありますけれども、バーチャルな関係を非常に築いてきているわけです。“今どき”の学生は、既に10年前には携帯電話がありました。小さいころから携帯電話を持ち、ゲームをやっているというような状況なので、要するに現実の具体的な人間関係ではないバーチャルな関係が、非常に大きな位置を占めているという状況が背景にあるのではないかなというのをすごく感じています。

それに反比例して、現実的に、実際に面と向かって対する関係というのは少なくなってきているという状況なのです。たとえば電車のなかでお化粧をする。私は、ああと思ってその人の顔を見たりしますけれど、全然私はいないかのごとく、透明人間かのごとく平然としています。それも、電車のなかもパブリックな場所ですよ。でも全く個室と同様なところ、たとえばトイレのなかと同じように振る舞ってしまうという状況です。

一方でとても人の評価を気にするところもあります。でも、その人というのはどういう人なのかというと、自分の身近な人なのです。要するに同じ学年の仲間や、そばの人の評価しか気にならない。

あとは、一般的な社会という、何かよくわからない大きな社会というようなものがあり、そのなかの中間にある目に見えるパブリックな世界に対して、非常に何か見えなくなってきているという状況があるのではないのでしょうか。ですから、自分がどんなことをしたら相手がどのように思うか、どういうリアクションをしてくるのかの予想がつか

かないというか、そのようなことがまず前提にあるのではないかなと思っています。

私は以前どこかのレストランで、ある何人かの家族、幼稚園生ぐらいの子どもたちが一緒に、クリスマスも近かったと思うんですけども、食べている様子をちょっと端から見ていたことがあったんです。子どもたちが、みんな携帯ゲーム機で遊んでいるのです。

○森 そうそう。私も同じような光景を見たことがあります。

○福原 お母さん方は、ゲームに夢中になっている子どもたちを放っておいて、話し込んでいる。この状況はいったい何だろうと思ったのです。子どもたちは、おそらく、自分のゲームのなかだけに没頭しているのかもしれませんが。何かその人の表情は見えていないわけですよ、ゲームしか見えていないわけですから。だから、表情がよくわからなくなってしまふ、自分が何かしたことが、相手がいいのか悪いのか、どのように思っているのかというのを何かちょっと、小さいころから養われていないのかなという感じがまずあるんですね。

ですから、その点で、非常に情報は入ってきます。それもインターネットなどから情報が入ってきているので、ある意味で生の情報、生ではないというか、何と言ったらいいんでしょうね、誤ったあるいは偏った視点での情報も、それがそうだと思いますというところがあって、思い込みが強いような気がするんです。

それをたとえば誰かに話してみる、いろいろな話し合いの場や、あるいはいろいろな違う世代の人と話してみるという具体的な経験があれば、また違ってきて思い込みだと修正されるのでしょうけれども、あまりそういうのがないのかなと思っています。

それで例として考えてきたのは、「対人コミュニケーション」の授業のなかで、ある一つの作業があります。たとえば6人グループごとに10グループぐらいできるとしましたら、そこにいくつかの形のある紙片を封筒に入れたのをそれぞれに配って、それを出して、みんなそれぞれ同じ形をつくるというゲーム形式の作業があるんですけども、そのときにいろいろな形があるですね。それを、言葉を話してはいけない。ジェスチャーもいけない。ただできることは、自分の紙片を相手にあげるとのことだけ。相手からもらってはいけない、あげることはできる。そういうワークなんですけれども、要するにコミュニケーションツールのうち、言語的、非言語的コミュニケーションは一切禁じられて、唯一自分の紙を誰かにあげる。それでやりとりをとくして、何か一つある決まった形をつくるんですね。でも、いろいろな形の紙片があるので難しいのです。それが最近すごくできなくなってきているという印象がありますね。そしてそのワーク自体が学生たちにとっては、ものすごくストレスフルな状況のようです。

そのあとのふり返りで学生各自が感じたことを書かせると、途中で嫌になったなどいろいろ書かれているのですが、何かコミュニケーションツールが文字や言葉そのものに限定されてしまう。たとえばバーチャルはそうですね。メールにしても言葉のやりとりです。だから、それしか頼るところがないというか、そういうものに限定されてしまっているのです。何かたとえばやりとりのなかで、「あ、そうか、あのひとはこういうのをくれたから、こういうのをつくってみようか」などと考えることをあまりしないよう。それぞれのやりとりのなかでの、お互いの雰囲気と一緒にするというか、分

かち合うというか、それがなかなかできにくくなっているところから、このワークが大変難しいものになっているらしいのです。

私が昔、学生時代に同じワークをやったときは、もうちょっとできたような気がします。それはゲームのあり方というのは、昔はたとえばトランプは、何かやりとりで相手のちょっとした表情やしぐさで、何となく声色などのいろいろなヒントがありました。

○谷野 そうですね、ババ抜きで、どうしてあれだけ盛り上がったんだろうというくらい盛り上がったのも、そのせいですね。

○森 お互いの顔を見るから面白いんですね。

○福原 そうそう。そういうことが、いまはテレビゲームなので、もう本当にそういう相手とのやりとりは具体的ではなくなっているということが、何かコミュニケーションとして違ってきているのかなというのがすごく感じられます。

たとえば携帯電話の普及率は、ほぼ100パーセントです。私たちも便利に使っていますけれども、そうすると、携帯電話でつながっているということもできます。しかし、携帯電話でつながってはいますが、今度は、逆につながらなくなると、すごく不安になるんですね。

○沼澤 だから、授業中も携帯電話をやっているんですね。

○福原 ええ、レスをやっているんです。ですから「すぐに返事が来ない」と言って、不安になってしまう。なかには、携帯電話と一緒に寝ているような学生もいたりするようです。

○原田 携帯電話をお風呂にまで持っていくということもあるようです。

○森 壊れてしまうじゃないですか。

○福原 だから、防水の携帯電話が出

たんです。

○森 ええっ、知らなかった。防水の携帯電話なんかつくらなければいいのに。

○福原 そうなんです。それは今度、友だち同士だけではなくて、親子でもそうですよね。たとえば地方から学生が来たりすると、親子で電子メールでやりとりをする。それもすごく便利で、親子の会話が増えたということがあるかもしれないですけど。

○森 でも、親に縛られそうですよね。

○福原 縛られそう、そうそう。昔はもう地方から出てきたら。

○森 便りのないのがいい知らせでしょう。

○福原 いい知らせで、もう連絡のしようがないから、親もしようがないとあきらめてしまうことがありましたが、いまはあきらめられないということもあるようです。よく学生部に親御さんから「子どもが行方不明なんです。探してください」といった連絡があります。「行方不明って、えっ、何があったんだろう」と思ってよく聞いてみると単に携帯電話で連絡がとれない、つながらない、というようなこともあります。

学生の変化の背景に、そういう状況があるということと、やっぱりいまのこういうご時世ですから、あまり希望が持てない、社会に対する希望が持てないという不安。また、何かこのままで行くと、自分はホームレスになってしまうのではないか、仕事にも就けられないのではないか、そういう不安のようなものはありますので、社会と私たちの生活は切り離しては考えられませんので、私はキーワードとして、そういうことがちょっと浮かんだのです。

○谷野 なるほど。そのようなコミュニケーションのあり方そのものが大きく変わっていくなかで、おそらく本能

的に他者とつながりたいという欲望も当然あるわけですよね。

○福原 あると思います。

○谷野 特に言語の小さなクラスだと、言葉は悪いですけど、学生が妙に親しげに寄ってきたり、またこちらが尋ねてもいないのに自分の問題を相談してきたりといったことが、どうやらいくつも見られるようです。森先生はいかがですか。クラスのなかで、そのような学生に対して、どのような付き合い方を考えていらっしゃいますか。

○森 いろいろなパターンがあると思います。かつて、アメリカで日本語を教えていたときに、授業中に課題として出した作文に、個人的な相談事を書いてきてしまった学生がいました。こちらとしては、そんなことは聞いたつもりは全然ないのに書いてしまうのです。そのときは若かったので、とても驚いて、こんなことを書かれてもどうしたらいいのかと思いました。このときは、単に課題として出した作文として採点して返しました。

個人的に話しかけてきたり、ちょっといろいろな話をたくさんしてくれるような学生については、ただ、ただ聞く。そんなに深い問題でなければ、ただ聞いてあげればいいし、何かつなげる必要があると思ったら、やはりそれは学生相談所などに相談して、連携するようにと考えています。

○谷野 いろいろな問題のある学生のことを最初に気づくのは、おそらくそういう少人数のクラスですよね。もし、気づいたときに、どうやって次の段階につないでいくかということは、すごく大事なことだと思います。そういう学生を発見したときに教員が相談に行く、あるいはその周りの友だちが相談に行くという。それはケアのあり方としてはどうなのでしょう。適切な対応なのでしょうか。

○福原 そうだと思います。本来ならば、本人が行ってくれば一番いいんでしょうけれども、なかなかそこまでは行かないケースもあるかと思っています。その場合は、本人にかかわっているご家族や、関係者がまずは相談することが適切な対応です。まずは、かかわっている方が相談にみえるというのがいいと思います。そうすると、その本人とかかわっているわけですから、どのようにかかわったらいいかということがご相談できますよね。そこから、まず入っていくということではないかと思っています。

以前でしたら、たとえばカウンセリングというのが、本人が、相談したい人が自主的に、主体的に来るという場だったんです。いまはもう、それだけではなく、もちろんそれが基本なんでしょうけれども、やはり周りの人たち、あるいは家族の方、学部の先生方や、あるいはいろいろな部署がありますよね。保健室や国際センターやチャレン室、そういうところがかかわっている方たちと連携を取りながら、その人たちと相談しながらどのように本人と、直接かかわっている方たちがどのようにかかわるかということをご相談させていただくことが必要になってきているのではないかなと思います。

○谷野 最近、授業中のコミュニケーションがうまくいかない、たとえば、授業中になにか気に入らないことがあると大きな声で怒鳴ってしまったりというような、問題行動を起こす学生も見受けられるようです。このような場合、本人にも自覚がなく、本人から相談に行くというところにはなかなか至らないような気がします。所属学部の先生に特に対応していただいたり、いろいろなことが考えられますが、その学生にどうやって対処すればいいのかと思っている教員も多いのではないかと

と思います。そういう対応も含めて、気がついた人がまず相談に行くということが大事だということでしょうか。

○福原 ええ、そうです。ただ、本当でしたら、なぜそういう行動を起こしてしまうのかという理由を、やはり本人にちゃんと聞くことが必要です。当の本人自身がわかっていない場合もありますが、それなりの理由があるのではないかと思われるのです。たとえばその理由をどのように聞くのか。たとえばちょっと下手なことを聞いてしまって、逆上されたらという不安がありますよね。その学生とどのようにかかわって対応したらいいかということも、カウンセラーが答えられるかどうかは別として、何か一緒に考えていくという場は必要なのかもしれないですね。そのためにも、気づいた人がまず相談することが大切だと思います。

○森 そして、だんだん本人に気づかせていく。

○福原 ええ、そうですね。ただし、自分の言動が相手にどのように受けとめられているかということ、想像したり理解したりしにくい人も、最近の大学生の中には増えてきているようです。対人関係において発達の未熟であるともいえますが、自分の行動のリアクションとして相手が反応しているということがわからず、相手から一方的にやられているという被害感から逆上してしまうというケースもあるようです。そここのところを本人がなかなか気づいてくれず、対応に苦慮する場合がありますので、ひとりで抱え込まない方がよいと思われます。

VI つなげあう授業

○谷野 たとえば、毎学期全カリの日本語を除く言語Bの必修科目では出席不良者調査を行っていますが、その結果や授業での様子に対して、より深く

対応をするのは、学生が所属する学部での役割でもあると思います。学部での具体的な対応はアカデミックアドバイザーで行うことになるのでしょうか。たとえば、法学部ではどのような対応をとられていますか。

○原田 実際に学生と面接をするケースもあります。ただ面接をする約束をしていても結果的に来ない学生もいるのです。面接まで来られる学生は、来られるだけで、もう回復傾向というか、以前はいろいろな問題を抱えていても、既に解決したり、あるいは心身の問題を回復しつつある状況で、比較的背中を押しやすいというか、押せるなどと思って、ある意味で和気あいあいとできることがあります。

アポイントメントを取ってもこないというタイプの学生はやっぱり、ためらっているというか、一歩出ようかな、出るまいかな、というような学生は、一定程度いるんだなということです。だから、何らかのアクションを取ろうとしている学生に対しては、もう一歩ちょっと前にも出てもいいかなと。まったく音沙汰無しの学生はいろいろな理由でタッチしづらいところがあるのですが、さしあたりまずは、ちょっとためらってアポを取ったんだけど断ったとか、何度もアポはとるんだけど、なかなか直接来られないという学生は、何とかもう一歩、こちらから出る必要があるのかなと感じています。

ですから、こちらからの求めに応じて、やってきた学生には、ゆっくりそつと背中を押してあげるというのと、ためらっている学生には、ためらっているなりの少しの積極性があるので、それを少し、チャンネルをつくってあげて、キャンパスに戻してあげるということが必要なのかなという気がしましたね。

しかしながら、一番問題なのは、何

の音沙汰も無いケースです。「便りのないのはよい便り」なのかもしれませんし、バリバリ社会で活動しているという可能性もまったくないわけではない。けれども、そうではない可能性のほうが高いとも思われる。



○福原 そうですね。かつて私が相談を受けていた低単位取得者の学生から、「ある新聞で京都大学が家庭訪問をするようになった」というような話題が出たことがあります。初め聞いたときに「えっ」と思ったんですけども、よく聴いてみると、その学生は「自分も家庭訪問のようなケアをしてほしかった」というようなことを言っていました。たとえば、大学から連絡が来たとしても行けないわけです。何かちょっと距離があって、教務課やそういうところには行けないから、家庭訪問はうらやましいとか言っていたのです。

○原田 これまでのように大学に連絡がなかったからほったらかしでかまわないということを、どこまで大学側の主張として言えるのかというと、だんだん疑わしくなってきたことは間違いないと思うのです。「案内を出しましたよ。来られなかったでしょう、それまでですよ」ということは、言えなくなっているし、またそうすべきでないんじゃないかなと思うのです。

○福原 そういうことでしょうか。そうすると、それこそもっと個別に見て

いかなければいけない。おしなべて、ただ低単位取得者というような枠組みだけではなくて、どうして低単位になったのかというところを、きめ細かに分けて対処していかなければいけない時代が来たのかなと思いますね。

○谷野 以前ですと、そういう低単位取得者というのは、簡単に言うと放ったらかしになって、自然にだんだん退学したりというかたちで何となく消えていっていた。最近ではむしろ、逆の立場から大学が積極的に呼び出して退学勧告をするなど、一方でそういう方法があります。でも、仮に退学勧告を最終的に選択せざるを得なかったとしても、やっぱり何か大学として求められているものがあるのではないかということですね。

○原田 そうですね。たとえば教授会では退学や休学といった学籍事項については必ず報告がありますが、そのなかでは、しばしば使われる表現は「一身上の都合」という理由なのです。しかし、「一身上の都合」といってもそれぞれの事情があるのだと思います。もちろん、学費といった金銭的な問題もあるのかもしれないけど、「一身上の都合」ということで、大学から去っていくこともあるわけです。私たちにはそれしか伝えられないわけですが、本人にとってみると、もっと深いいろいろな問題があって、場合によっては、救えたのではないかと思うのです。では、どうしたらよいのかということもいつも思います。

○森 そうすると、家庭訪問をしてほしかったというようなタイプの学生の例をみても、きっとその「一身上の都合」のなかには様々な事情があるのでしょうね。そのような学生たちは、本当は来たかった、でも、何かの事情で来れなかったということでしょうか。そうすると、どうしたらよいのでしょうか。

か。

○福原 私の場合、立教大学出身ではないのですが、自分の出た大学と比べて立教大学の場合は、すごく面倒見が良いように思います。

○原田 他大学と比べると良すぎるくらいです。

○福原 私も最初立教へ着任したときは、学生へ手をさし伸べるという姿勢は、驚きました。それは、キリスト教精神、つまり、建学の精神なのかもしれないですけど、いろいろなかたちで伝統的にそういう何か手をさし伸べるところがあるのではないかなと思います。そこで、そのような試みをもう少し有機的に連携しながら伸ばしていくとよいのではないかと思います。

○谷野 ある種おせっかいのようなものです。口を出して、介入して、それに学生が反発してくれば、それはそれでOK。むしろ、そういうことによって学生がほっとする、ようやく来てくれたかと思えるようなことが仮にあれば、それはおせっかいでも、ある意味、有用なおせっかいかなと思います。しかし、いまの大学の授業のシステムのなかで、そういうことを教員がやるというのは難しいですね。

○原田 おそらく、少人数の授業を受け持たれる先生方、特に言語の先生方がその最前線に立っていらっしゃる。今日の座談会で、改めて痛感しました。

○森 言語科目は全学生が必修として履修しますから、どうしても通ります。しかも、1年生という一番不安定な時期にです。

○浜崎 そういう意味では、私は基本的にはたぶんおせっかいのほうの人間で、たとえば、個人的な話をしに甘えてくる学生がいた場合には、とりあえずは小言をはさまず、聞くようにしています。でも、その自分の態度にジレンマを感じるがあります。こちら

がいい相談相手の顔をして話を聞くことで、逆に、このまま甘えていていいよというメッセージを学生に対して発してしまっているのではないかと、本来ポテンシャルを持っているはずの学生たちが、いまのままでいいんだと思ってしまう空気をつくってしまっているのではないかとということです。本当は、もう少し大人扱いして、ここまで君たちは来られるはずだから背伸びをしなさい、という接し方を、私も心がけなければいけないのかなと思うことがあります。

自分の学生時代は大人だったとも、いまふり返れば全く思わないのですが、少なくとも大人になろうとしていたと思うんですね。

○森 そうそう。本当にそうですね。

○浜崎 私は、今に比べてとてもお気楽な時代に大学生だったということもあって、学生時代、いかに自由を謳歌するかということに一所懸命頭を使っていたような気がします。そういうきっかけを初めて掴むのが大学であって、それは昔も今もそうですね。高校まではかごの中、あるいは檻の中にいるけれど、大学へ入学することによって、初めてそこを出ることができるようになったけれど、今は、かごを出ることの楽しさが、学生たちに見えていないという感じがしています。ですから、私たちは、一方ではおせっかいにケアをしながら、でも一方では「大人になるって楽しいんだからね」ということを、学生たちにもうちょっと見せることができないか、そのために、「ここまでおいで」と要求する、そんなことができないかなというのを課題として感じています。

○福原 それはとても大事なことだと思いますね。モデルというか、こういうことを期待するという、このように

なってほしいとか、あるいは、こういうことをやってみたらどうということや、どんどん教員の方から言うことが必要だと思います。

何かやったり、ちょっと背伸びして自分が自由になる、いろいろなことを考える、あるいはいろいろ反発する、規制のいろいろな考え方や価値観だったり疑問を感じる、何かそういったことにチャレンジするような、何かそういったものを投げかけるといことは、とても必要なことではないかなと思います。

もちろん、おせっかいも必要悪じゃないですけども、それはせざるを得ない。しかし一方ではやっぱり学生たちを鍛えていくとか、育つのをこちらから声をかけていくということも必要だと思います。



○谷野 そうですね、幸い大学はいろいろなタイプの先生がいらっしやるので、厳しい先生がいたり、優しく話を聞いてくれる先生がいたり。いわば学生から見るとロールモデルと言うんですか、自分が生き方の手本にするような、いろいろな意味のタイプのロールモデルはあるはずですよ、でも、それらが機能していない、お互いにつながりあっていなくなってきた、というのが問題なのかもしれません。

Ⅶ 心と身体バランス

○沼澤 健康教育に携わっている立場から言えば、その学生を鍛えなければいけないとか、大人に対する気づきも非常に重要だと思うのですが、その土台になる身体や健康のことを考えてほしいのです。先ほどのゲーム世代のところでも出てきたんですけども、イメージーションやそういったところに偏っていて、自分の身体を使って何かするという事は、なかなか少なくなっています。

勉強したり、仕事をしたりする基盤となる身体を動かしていかないと、心とのバランスがついていなくなるような気がしています。最近、学生相談所へ相談に行く学生が増えたり、身体の調子が悪いと保健室へ行く学生が増えたりしているというのは、本当に身体を動かす時間が少なくなっているところの反動かなと思ったりしています。

逆の例をあげると、幼稚園の園児でさえも、やっぱり学級崩壊のようなものが起こっているようで、その幼稚園児に、朝来たら園庭で30分間、とにかく身体を動かす。そうすると、朝ちょっと熱があったり、逆に熱が35度ぐらいしかなかったりする子どもが平常になっていって、先生の話もしっかり聞けるようになるということがあります。身体と心は本当につながっていて、身体を動かして、それでいろいろな刺激を脳に与えてやることによって、学習意欲も高まるということがあると思います。

そういう意味では、もう少しスポーツ実習を履修してもらいたいんですけど、残念ながら施設の制約もあって、なかなか多くの科目を開講することができなくなっています。

○浜崎 大人数授業の前に5分間体操をしたらどうでしょう。

○福原 そうですね、ちょっと身体をほぐして、そうすると集中力も出るということがあるかもしれないですね。

○沼澤 ベースになる身体のことを、もっと学生にもわかってほしいなと思います。

○原田 確かに大学は、頭と心に向けているというか、身体に向けられていないんですよね。本当に。

○谷野 そういえば、異文化コミュニケーション学部の中かで「基礎演習」という科目があります。この科目では、普段はディスカッションとプレゼンテーションを繰り返していきます。それには手順があります。毎回そのたびごとに4、5人のグループをつくるんですが、お互いよく知っているどうしても必ず儀式として自己紹介をする。まず自分の名前を言い、いま自分がしたいこと、興味のあることを言う。次の人は、前の人が出たことを繰り返して、みんなに紹介してから、自分の自己紹介をする。そうやって、自己紹介を繰り返し行い、お互い全員を熟知する。

そして、それが終わって「じゃあ、始めましょう」というときに、一度全員が立ち上がってその場で10回ジャンプする。1、2、3、4と数えながら10回ジャンプし、終わると、「はい、それじゃあ、みんな握手」と言って、お互い全員と握手する。そして「よろしくお祈いします」とみんなで言う。ここまで終わると着席してディスカッションを始める。というような手順で、少人数のゼミをやっているのです。

○沼澤 そうすると、絶対集中するんですよね。

○谷野 そう、集中するんですよ。

○森 面白いですよね。学生は嫌がるかと思ったら、そうでもない。「先生、今日もジャンプするんですか」と学生のほうから積極的に聞いてくる。

○原田 そういった試みが行われているなんて初耳です。私が不勉強なのかもしれませんが、それはぜひ全学に知らせたほうがいい。脳と身体をつなげる準備体操のようなところなんですよ。

○福原 たぶん、そうだと思いますね。リラクセスもできますし、やっぱり握手というので触れ合いますから。そういうところも、話しやすくなるというのはあると思います。

○浜崎 実際にやってみると、身体全体に血が廻る感じがして、身体がほぐれます。

○森 頭もね。

○浜崎 授業が始まる前の学生をみると、それぞれが閉じていて、身体も脳も目覚めていない感じを受けますのですが、「始めの儀式」をしたあとは、背中もちゃんと伸びて、顔色も違います。

○原田 法学部だったら、みんな『六法』を持ってジャンプする、ということになるかもしれませんね。

○森 「はい、ここでジャンプ、はい、両手に『六法』を持って」とか言って(一同大笑)。

○谷野 ありがとうございます。何となく『六法』のところで座談会の落ちがついたようなかたちになりました。本日は、「今どき」の授業を考える」ということで、長時間お話いただきどうもありがとうございます。

○一同 ありがとうございます。

(了)